

2024年に実施される

大学入学共通テストを最後に、共通一次試験時代から続いてきた「簿記・会計」の出題が受験者の少なからずから廃止されることになった。また、近年は下げ止まってきたものの、公認会計士試験受験者数も低迷し、筆者の所属する学会では「会計学にどう興味を持ってもらうか」が頻りに話題となっている。

わが国では、会計学を学ぶ際にまず突破しなければならないハードルがある。それは簿記である。高校・大学を問わず、会計学を学ぶカリキュラムの入口には簿記科目が存在し、また、

会計嫌いの学生を減らすには

「」から始まり、ラーニングというよりもトレーニングを受けている気分となる。この時点で一定数の学生が簿記嫌いとなり、会計学から遠ざかる現状がある。

もちろん簿記は有用なスキルであり、わが国の学生の簿記スキルは、海外ではかなり高いレベルにあるという。ただし、簿記は決算書を作成するための技法であり、間違いなく会計学の一部を構成しているが、簿記は会計ではない。やはり簿記から始まるカリキュラムの影響は大きく、筆者もよく初対面の方に「大学で会計学を教えてください」と話すと、「ああ、簿記ですね」という反応を目の当たりにする。

それでは、会計とは何か。一言でいえば、経済活動を認識し、測定し、記録し、

食事と体重を記録するだけで痩せられるという。この方法は、図らずも会計の本質を突いている。つまり、毎日何を食べ、体重は何キロ増だったかを測定し、記録する。こうすることで初めて、体重が管理可能になるわけである。

認識から報告に至る一連のシステムが会計であるならば、それらを教える会計教育はどうあるべきか。教育者が試行錯誤している現状があるが、近年ではいくつか興味深い取り組みが始まっている。例えば、海外や国内のいくつかの大学において、レゴ®のブロックを使った会計ゲームを活用したアクティブラーニング授業が行われている。ブロックを使用して自動車や製造・販売するが、部品点数を減らすことで製造コストが低くなる。ただし、デザインが優れていなければ市場から評価されない。一連のビジネス活動を模倣するなかで、会計を学ぶ授業デザインとなっている。紙幅の関係上、詳細は成書に譲るが、簿記会計のイメージをいかに変えていくかが会計教育の課題である。

会計教育が 直面する課題

科目内容が各種簿記検定とひとづけられている点に特徴がある。そのため、初学者は「左が借方で右が貸方



愛知淑徳大学 教授 森 洵太

報告する一連のシステムである。このうち簿記は、記録を担う技法である。そして重要なことは、この認識から報告に至る行為が一連につながっている点である。われわれは物事を認識し、物量を測定する上で、ようやく管理できる。たとえ実体が存在していても、認識できなければ存在しないに等しい。ダイエットの

【参考文献】菅原智「会計のイメージを変える―経験学習による会計教育の挑戦―」中央経済社、2021年

もり・じゅんた 財務会計、国際会計。大阪市立大学大学院後期博士課程修了。博士（経営学）。1983年生まれ。

方法に「レゴ®ダイエット」と呼ばれるものがある。ただ単に、毎日の